

# 祭布調



## 目 次

委員会アピール	2
執行委アピール	10
調布寮アピール	14
短大実行委アピール	16
催物日程表	18
講 演	19
クラス、サークル企画	24

# 第19回 調布祭

6月21～22日

## 働祭

長く、暗い俺達の沈黙は終わった  
酷寒の独房生活と直截的な断圧に対する地下生活に別れを告げ  
俺達は再び強固な戦列を打ち立て  
電通の森の中に俺達の団結の雄叫びを響かす  
聞け、すべての偽政者よ  
聞け、すべての沈黙者よ  
聞け、すべての裏切り者よ  
俺達は甦り、一切の情念と訣別する  
渦まくカオスの中で  
俺達のパトスは燃え、俺達のエトスは一切の欺瞞を看破す  
よく見るがいい 同胞よ  
よく聞くがいい よく聞くがいい  
あのまさに剥れんとする教授達の鉄仮面を  
あの犯罪的な右翼秩序派、民青の野合する不響和音を  
俺達は……… 俺達の戦いは………  
困難な 困難な 困難な戦いは、今まさに序章を経たにすぎない  
ダモクレスの剣をまさに頭上に載いておのゝく君は幸せだ  
断ち切れ一切の情念を  
夜の底でうごめく価値の悪魔を  
立て同胞よ  
行け同胞よ  
息苦しいのどに足踏みする象の群れに炬火を投げろ



実行委員会アピール

闘いの中から自立の思想を構築し  
——社会変革の主体的担い手  
として自らを登場させよ——

理由もなくかなしかつたとき きみは愛することを知るので  
夕ぐれにきて夕ぐれに帰つてゆく人のために  
きみは足枷になつた運命をにくむのだ  
その日のうちに  
もし優しさが別の優しさにかわり明日のことが思いしられなかつたら  
きみは受肉を信ずるのだ 恋はいつか  
他人の血のなかで浅黄いろの屍衣のように安らかになる  
きみは炉辺で死にうるか  
その人の肩から世界は膨大な黄昏となつて見え  
願いにみちた声から  
落日はしたたりおちる  
行きたまえ  
きみはその人のためにおくれ  
その人のために全てのものより先にいそぐ  
戦われるものがすべてだ  
希望からは涙が  
肉体からは緊張がつたえられ きみは力のかぎり  
救いのない世界から立ち上る

(「吉本隆明詩集」より)



## プ ロ ロ グ

調布祭を実行して行く場合、如何に何をやるのかを考えねばならない。即ち我々が行動する場合自分達が如何なる立場にあり、又如何に行動するのが問題である。過去に於る調布祭の低迷から脱脚する為には再度調布祭の持つ意味、即ち大学祭の理念が追求されなければならない。そして大学祭の理念の要素として、我々学生は社会に於ていかなる存在であるのかといった学生の存在論の問題、特に理工系の大学である電通大ではさらに科学技術論の問題が加味されるだろう。さらには大学祭そのものが置かれている大学の問題、即ち大学の現状を踏まえた上で、大学の本質、学問の自由と学問の階級性の問題、そして大学の自治とボツダム民主主義への根源的な問いかけがあるだろうし、大学祭に関わって、その中で積極的に行動する我々自身の意識性及び主体性の問題が問われるであろう。

過去の調布祭を振り返ってみると、調布祭が自己変革の場、主体形成の場、あるいは創造的文化運動、等々の場として位置付けられているにも拘らず、何をどの様に変革し創造して行ったら良いのかということが全く欠落していた。統一テーマの決定にしても、テーマとは何かを問うことなくテーマは決めなければならないという焦りから「身近な問題をとり上げて皆でそれについて考えよう」といった、いわばテーマの為のテーマでしかなかった。テーマとは、我々が置かれた社会的状況を分析し個人が認識し、さらにその様な社会状況を如何に変革しうるのかといった、いわゆるベクトルとしての方向性を持ったものでなければならない。

## 調 布 祭

### 過去3回の総括

第19回調布祭実行委員会は過去の調布祭を批判する所から出発した。そしてそれを通して大学祭理念の追求を始めたのである。第16回テーマ『孤塁を脱して自己の究明に徹しよう—破壊、創造と建設の中で—』は主体的自己の確立を叫んでいる。しかし、テーマ解析の導入では、科学技術の進歩による人間疎外の問題と原子物理学の発展による人類存続の問題を軸に展開されているが、人間疎外の規定に誤謬があったため、人間疎外の問題と人類存続の問題を科学の進歩が原因であるとしてしまった。即ち彼らは人間疎外の要因として、オートメーション、集団、マスコミに限定し、機械と人間を主従関係に置き、集団が人間を圧迫し連帯感の欠如、責任感の欠如が生ずるとし、マスコミによって主体性が喪失しているのだと規定している。しかし科学技術が発達したから人間疎外が起ったと見るのは極めて一面的な見方であり、狭い視野である。人間疎外の問題は社会的な生産様式に於るところの労働疎外の問題、自己疎外の問題を抜きにしては語れない。即ち社会的現実の中で生活する人間が労働という自己対象化の活動に於て、自ら造り出した生産物、あるい



は生産行為がかえって独立した存在として自己を支配し、規制するといったことが科学技術の進歩とともにどの様に人間に作用して行ったのかを追求しなければならないだろう。資本制生産様式に於る科学技術の問題はごく簡単に言ってしまうと、資本主義の本質としての資本の自己増殖過程が進み、生産的資本が増大すればするほどそれだけ分業と機械の使用がますます拡大し、分業と機械の使用が増大すればそれだけ、労働力を売ってのみ生きることができる労働者間の競走は激しくなり、彼等の賃金は収縮し、放逐されて行くのである。従って表面上人間(労働者)が機械に放逐され、機械に支配されているがごとく見えるのである。ブルジョアジーは新型の機械を使用し、合理化することによってのみ資本家間の競走に勝利することができるのである。しかも放逐された労働者のかわりにその機械を管理し、残った労働者を合理的に管理することのできる者が補充されるのである。まさに、この様な階層への可能的存在として我々学生が存在し、技術者、インテリ等々を再生産して行くという機能を果しているのが現在の大学の姿なのである。人類存続の問題にしても、生産されたものが生産者の手に入らずに逆に生産者を規定して来るといった、いわば生産手段の所有形態と自己疎外の問題であろう。しかし16回実行委員会ではこれを科学技術者の義務と責任の問題にすりかえている。もちろんこれも大切ではあるが分析と方向性のない義務と責任を叫んでも無意味である。この様な重大な誤謬を含みつつも解決の糸口として、人間尊重の立場から個人を受動的な制約された人間として捉えるのでなしに、能動的人間として捉え、歴史を作るのは人間であることを強く訴えている。そして創

造と建設の為に、自己を規定する歴史的社会的条件の破壊と行動を要求している。我々はこの結論に一定程度の支持を送ろう。なぜなら歴史的社会的条件とは何かの分析がなされていない故に破壊と行動の方向性がないからである。さらに第16回調布祭に於て実質的にこの結論が展開されたかどうか疑わしいからである。

第17回テーマ「エレクトロニクス」—その演ずる役割と方向性—に於ては、エレクトロニクスを謳歌すること科学技術庁か電器メーカーのごとくで、機械に対する人間性の喪失と人類破滅を説き、結論として自主性と協調性を持った良識ある社会人になれと言うのみである。こんなことなら誰でも言える。そして自主性と協調性を持った良識ある社会人が現在我々に対して何をやって来たのだ。彼等は自己の社会的地位を利用し協調性と良識という甘い言葉で支配機構を侵透させて来たし進歩的インテリゲンツィアという外被をまとったインポのインチキゲンツィアであったということを我々は知っている。第17回調布祭は何の問題提起もせず、何の内容的発展もせず、否むしろ16回に比して退歩であったろう。そして電通大斗争に大弾圧を加えて来た、松波前学生部長は「学生がかわいくてたまらない」「学生の熱意と青春の美しさに感動した」「要は一人でも多くの学生がお祭りの日に学校に来て、できればあふるるばかりに学生が集って青春のエネルギーを爆発させてくれればそれでよいのだ」等々のマンガ的発言をしている。最後の言葉は支配者が昔から使ってきた祭の論理であることを我々は知っている。第17回調布祭は何となめられた存在であったろうか。

第18回に於ては、テーマが何如にして決定



されたかが全く明らかにされておらず、いきなり天下りの「科学—その過去、現在、未来—」というテーマが出されている。そして科学に対する認識を一定の目的と方法の下に対象を系統的に追求する学問として位置づけているにもかかわらず、取り上げられた問題は科学技術であり、これまた人間疎外と人類滅亡を軸に展開されているのである。そして結論として、科学に対する認識と理性が必要で、人間性を回復し社会へ主体的な働きかけのできる人間になるべきであるというのみである。しかし現実的には何ら主体的に働きかけることもなく、青春のエネルギーをフェスティバルに消耗して行ったのである。第18回総括ではテーマ解析の事なかれ主義が反省されているが、その裏にあるものを捉えきれない読者に責任を転嫁している。第18回の目的は全員参加であるから、何でも人数だけ増えればよいといった安易な姿勢から、十分成功であったとさえ言っている。しかし今後の基本方針の内容については一般社会に密着したものを取り上げ、社会情勢に適応して、その問題についての批判を発表し、その方向を明確にすべきであると言っていることに対しては賛成である。以上の批判から我々第19回実行委員会は大学祭理念の追求と同時に、我々の主体的行動の向けられるべき現状、即ち我々の置かれている社会的状況を分析して行くこと以外に調布祭の低迷を打破することはできないと考える。現代社会に於る大学の位置を究明する過程の中で我々の存在に立脚した調布祭が、我々をとりまく諸矛盾を解明する方向に創造されることを意図するものである。

## 世界情勢

我々が世界の情勢分析を行なうのは、現代の我々の表現様式が、民族・国家という特殊性に規定されていながらも、その特殊的規定性の枠を超えた普遍的質を持った闘いが現実の生活に波及している位相と水準を鮮明化する為である。

我々の世界把握の方法は、市民社会—国家の再編過程の矛盾の中にとり込まれる世界性普遍性をとりだすところに中心環が置かれる。帝国主義への資本主義の発展段階は、世界市場—世界貿易を現実のものとし、我々の生活は世界を前提にしないでは存在できないようになった。同時に帝国主義は「市民社会—国家」の矛盾を巨大独占体による資本と生産の集積と私の商品所有者の増大（人間の自然性の商品化）として極限までのほりつめさせている。他方「労働者国家」という特殊な共同体においては帝国主義への同質化へ接近するか、「革命」の内容を変革する他ないという矛盾の中で動揺をかさねている。

現在の世界情勢の特徴は、世界貿易—世界市場をめぐる解決のない抗争に突入しているという事であり、政治過程に於ては戦後世界統治体制としてあったヤルタ体制—国連の一切が後進国の革命闘争によってつきくずされて、機能しえなくなり、新たな統治体制の再編が帝国主義のヘゲモニーの下に激烈に進行していることである。

その前者は、IMF通貨体制が、重化学工業を中心とした巨大独占体の確立を軸にした各国帝国主義の平準化によって、ドル危機ポンド危機を生みだしている。その事によって再編をせまられ、SDR等によって擬制的に



解決しようとしている事である。しかし、西独のマルク切り上げに対する各国帝国主義の思惑にもかかわらず西独の新たな市場再分割戦へのなぐりこみの野望によって矛盾は広がるうとして、中心通貨ドルへの、ひいては制度全体への危機へ波及されるだろう。またドゴール退陣という政治的表現は、フランス帝国主義の失墜によるフランの危機化、ひいては再度のドル危機を誘発を顕在化させるといふ極限状況へ至ろうとしている。先進帝国主義国間のこのような矛盾を、後進国市場を再分割抗争というかたちの中東、アジア、アフリカ、中南米の人民の収奪によってしわよせさせ、戦後第三勢力といわれた国々を政治的・経済的に従属を強めていく事によって再編しようとしている。

そのような戦後世界経済構造の危機をより一層累積させているものにベトナムを頂点とした世界の解放革命闘争が位置している。彼らの闘争は単に政治的解放(戦後の民族独立)が新たな社会経済体制からのしっ拵になった経験から、社会的解放へ向わない限り完結できないことによって永続的社会革命の質を内包している。ベトナム闘争は土地解放という形で、人間と自然との関係の変革という問題が進行する事によってインタナショナルな問題を我々に投げかけているのだ。ともあれ、このような反帝闘争を抑圧するために、過渡期の政治体制は反革命を強調する形で再編が進行している。

NATO - 安保はその表現であり、現在のナショナルな反権力闘争もNATO・安保体制と必然的に接触する事によってインタナショナルな規定性をおびざるを得ないのだ。✽

(世界情勢の項、以下13頁に続く)

## 国内情勢と 教育情勢

現在大学の置かれた情勢を考える時、戦後日本資本主義の発展段階と切り離しては考えられない。又全国各地で学園闘争が起り、我が電通大に於ても全国学園闘争の先進の一翼を担い過去半年に亘って当局の露骨な弾圧に抗し、大量逮捕、二名の退学処分にも屈せず現在も熾烈な闘いが展開されている。この全国学園斗争の中で大学、及び社会総体が再編の過程にあり、その中で我々学生が如何なる矛盾を有する存在であるかをより一層鮮明にした。今後の闘いの方向性をより一層明確にするために大学の歴史的 position を究明する必要がある。

1945年日本ファシズムは連合軍に無条件降伏し米軍占領下に入り、米軍は日本軍解体と同時に日本資本主義の近代化を計った。又教育政策に於ては軍国主義から自由主義、市民主義的内容へと改革され、いわゆる民主化教育が行なわれて行ったのである。しかし日本支配階級は国体護持を計り、革命を予防し民主化に抵抗し続けて来た。こうした中において日本人民は平和と民主主義を求める闘いを展開し、47年日教組、48年には全学連が結成され、47年教育基本法、学校教育法が制定されていった。47～49の東ヨーロッパに於る人民民主主義革命と49年の中華人民共和国の成立によって米ソの対立が激化し米帝国主義は反共軍事同盟とIMF、GATTというドル=ポンドによる世界支配体制を確立しその為米帝の政策は日本を反共の砦とする方向に転換する。即ち日本独占資本の育成(ドッジ計画)と労働運動の弾圧(2.1スト中止指令、松川事件等々)がレッドパージと共



に進められた。教育史上に於るレッドパージとイールズ事件は名高いものであるが、こうした反共民主教育へと教育政策が転換する中で新制大学は発足して行ったのである。このようにして戦後日本帝国主義は47年の革命的危機を乗り越えGHQ体制の下にブルジョア政治体制＝議会民主主義体制を確立した。さらにアメリカのテコ入れによって独占資本の再編が進められ、50年の朝鮮特需で一挙に日本資本主義は復活しサンフランシスコ条約＝日米安保条約の成立により戦後ブルジョア政治体制は安定した。即ち労働者階級と国家権力との対決を一切代議制民主主義という体制内に押し込み、労組は経済斗争の場となり、平和と民主主義を守るといった擬制の共同体としての象徴である議会が確立していった。大衆に於ては第二次大戦を原体験とする厭戦意識からこの民主主義議会に吸収されて行ったのである。敗戦から50年代前半までは日本帝国主義の再建の時期であったし、大衆の意識としては敗戦ショックと戦後混乱の体験から抜け出得なかったと云える。

50年代後半から日本資本主義は設備投資を主導として高度経済成長をとげ独占化と合理化を急速に発展させていった。それに伴い日経連などを中心とした独占資本の教育への要求が漸次強まって行った。即ち戦後の学制改革を非難し、普通教育の尊重を改め、職業教育を強化せよというもので、中学、高校、大学に於る複線化案も出されている。そして54年には「教育の中立性」という名目の下に教育労働者の政治活動を禁止した教育二法、56年に教育委員会を公選制から任命制に変え、57年道徳教育の設置、学習指導要領の改訂、教科書検定の強化を推し進めた。58年にはこうした政策を完成させるべく、勤務評定

が実施されたのである。この様に50年代は日本独占資本の自立の過程とともに日本の大学以下の教育の中央集権化の時代でもあった。そして60年安保は、日本資本主義が高度成長の下で産業構造の近代化と、帝国主義的アジア進出が独力では不可能であるという認識の下に、米ソ二極集中型冷戦構造へ依拠することによって利益を見出した、とともに日本資本主義が、アメリカと対等に対外進出を志向することの予告としても存在していた。

国民的な反対運動の高揚の中で安保は改定され池田内閣が「高度経済成長政策」と「所得倍増計画」をもって登場して来た。来たるべき開放経済体制に備えて国際競争力の強化国内体制の再編強化に向った。即ち当時の日本資本主義はアメリカと対等な軍事力を整備するだけの政治経済的な面での力量を備えていなかったのである。それ故に対外軍事外交は全面的にアメリカに依存しつつ、自らは国内再編と国内市場を開発するといった対内膨張期にあったのである。

こうした中で、全産業構造の再編の一環として大学に「自主技術」開発体制の確立と技術者の確保及び高度の労働管理能力をもった労働力の再生産といった二つの問題が課せられた。自主技術開発とは外国技術導入による急激な技術革新・高度経済成長から、国内での技術開発による国際競争力の強化を目指すものであり、60年の「10年後を目標とする科学技術振興の総合的な基本方策」から現在の「科学技術基本法」「筑波研究学園都市構想」に至る政策として展開される。

そして第二の課題、計画的労働力養成の問題は「経済発展計画」に照応した労働力の質的、及び量的確保としての「人民能力開発」政策である。60年池田内閣の「国民所得倍増



計画」における人民能力開発論、62年「人づくり政策」63年中教審、「大学教育の改善について」63年経済審議会人的能力部会「経済発展における人的能力開発の課題と対策」、65年大学基準研究協議会「大学の設置基準の改善について」、等より次々と発表された。具体的には教育が労働力の再生産の場として語られ、教育投資論なる教育観が登場し、経済政策の一環として教育政策が位置づけられた。そして高級技術管理職、中級技術者、中級サラリーマン、下級単純労働者という階層に分化されて行った。この様に人間の能力をテストにより選別し、一面的に徹底させ、スペシャリストとして開発して行こうとするものであり、人間の専門奴隷化、労働力商品化である。これを産学協同路線と言い、この路線を貫徹せんとして学力テスト、能研テスト、学科目省令等により国家的な規模で具体化されて来た。文部省の大学支配政策の突破口が教員養成制度の改悪であり、次々と目的別大学化、大学の格差付けを行なっていった。この格差づけは64年の「学科目省令」の制定により、①研究者、管理職養成大学（旧制帝大）②中堅技術者・事務労働者養成大学（旧制高校・専門学校）③教員養成大学（旧制師範）という形で行なわれていったのである。以上の様に50年から65年の教育政策は日本資本主義の発展に見合った形での労働力の育成であり、教育機関の掌握の時期であったといえる。そして現在も我々を抑圧してくるころの大学再編は進行しているのである。

60年中期に至り高度成長の対内膨張性に原因する構造的不況＝過剰生産恐慌を現出せしめた。日本資本主義はこれへの対処として日韓条約を機に、本格的アジア侵出を始めた。又、他方米帝のベトナム戦争の敗北とアジア

支配の危機は、そのまま日帝の危機としてある。そしてベトナム人民を頂点とする世界階級斗争の進展と、ドル危機の中で、後退する米帝を補完しつつ、日帝独自の侵略を進めようとしている。即ち韓国、台湾、インドネシアとの一連の賠償借款（国家資本の投下）、民間に於ても資本輸出から直接投資へ、あるいはアジア開銀等の金融進出、とりわけ外交に於るASPAC（アジア太平洋閣僚会議）は主要な環となっている。70年代日米軍事同盟の必要性はここにある。現在コストダウン戦争の中で国際競走力強化が叫ばれ、中小企業の整理、産業、金融体制の超寡占化が進行し、さらに公共部門（運輸、医療、大学）に対しても抜本的再編を資本に要請されている。この様な情勢の下に我々は現在、大学にかけられてくるころの様々な抑圧を跳ね返し、粉碎する闘いを繰り広げている。我々の斗争は自然発生的質を持ちながらも、権力の弾圧をことごとく粉碎して行く中で、生の本質の何たるかを問い、様々な本質的問題に対して問いを投げかけて行った。我々の闘いはあくなき生への追求であり、我々の生活と無媒介な抽象理念に対しては、その欺瞞性を徹底的に暴露し、生活に立脚した思想を構築して行ったのである。そして今また、中教審答申、大学立法という形で我々を弾圧して来る権力に対し断固とした戦列を再構築し、全国の闘う学友と共に闘っているのである。我々は今や個別学園斗争の枠を打ち破り、本質的普遍性を持った闘いをさらに展開して行かねばならない。



## 大学祭の理念

以上不十分ではあるが現在の我々が置かれた位置を分析して来たが、我々実行委員会は調布祭をやはり破壊と創造の運動、自己変革の場、社会変革の場として位置づけ、さらにそれらが発展止揚させなければならない。そしてその方向性を常に見出す努力をして行かなければならないだろう。即ちプロローグで述べた様に調布祭を実行する場合如何に何を何故にやるのかを考えねばならないといった問題はサークルに於ても、日常活動を行なっていく場合にも難しい問題なのである。これは個人の自己展開=自己意識の問題ともなってくるが、各個人、各サークル、団体は常に追求すべきである。そうしてのみ社会変革の方向性が生まれて来るのではないか。我々学生の本質的共通問題を積み重ねられた討論の中から矛盾の止揚へと向っている言葉をテーマと呼ぶべきであろう。否、テーマとはそういう言葉を指さねばならないのである。

又、実行委員会の組織が、クラス、団体からの代表者で構成されると、無差別・無目的な大学祭となりがちであり、参加することに意義を見出し、自己満足に終わってしまうのである。従って意識としては外見的成功、量的拡大を望むようになるのである。又、有志のみによる組織は委員会のクラブ化サークル化を招きがちである。いずれにせよ上記の問題意識を持ち積極的姿勢で取り組むことによって解決されなければならない。

## エピローグ

自然はその詩的神秘性を階級社会はその人間的幻想性を、共産主義はその怪物的疑惑性を脱ぎ捨て、生身の人間のみが日常生活の地平線上にその全身を現わす。地球は狭くなり、歴史は本流をなし、斗う世界人民の、“革命”の相言葉が叫ばれ、人類は初めて自らの姿に驚きと喜びをもって気付く。彼等の真剣なまなざしを見よ！未来は彼等のもの、われら同志のものである。

同志諸君、革命の新しい時代が訪れた。我々は革命が体制の変革であることを、斗う人民自らの権力の確立であることを、斗いのくみ尽くせぬ源泉たる大衆を想い起すだろう。騒々しいざわめきは次第に遠のき、かわって重々しい地鳴りが確実に近づいてくる。新たな試練の波を乗り切るべく、今こそ我々は自らの足場を確かめねばならない。

敵の喉元にせまる斗いを。階級社会の背骨に食い込む斗いを。敵権力の生命線を断ち切る斗いを。

自らの手で歴史を、世界を塗りかえよ！  
自らの権力を打ち立てよ！ 自らの斗いの質  
——大胆で卒直な階級斗争によって打ち固められた戦列の形成を！



## 執行委員会アピール

### 個的領域に於ける闘いと 政治への肉迫

#### <Ⅰ> 序 章

闘いの雄叫びは、時には強く、時には弱く響いた。それは闘いの中での錯索した類と個の<生>の幻想が時には強く時には弱く渦巻くことの表現に外ならなかった。垂直的に幻想された<生>と<死>ユートピアと、水平に置きなおされた連続の時間に向かって延びる政治のユートピアの交合する領域で、個の<生>への闘いが表現されるはずである。しかし、政治はそれに対して、<類の生>ということによってしか答えられないし、開かれた全体性のもとでは部分性にすぎない。またそこには、どれほど革命的な政治指導家も一人の自発的な死を超えない、という悲惨な真実もそこにある。したがって政治とは虚偽とし現われるのであり、政治の部分性を鋭く表示するのは、諸国家の分立であり、国家制である。現在、世界のいかなる国家も、世界・類の普遍性の理念をその光背としてもたねば、内に外に国家として存在不能であるにもかかわらず、その普遍理念の現実化は国家自らの否定としかありえない、という逆倒の中に、国家の虚体性が端的に示される。

<個>が末踏の領域に対置した時、その意識性は<類>の共同体として幻想性を形成することにより、その<個>の生は幻想の荒野でやはり模索するしかないのである。<個>の生としての極限が<死>によって完結された時、人の自発的なあるいは強いられた死の存在は、すでにして類の生と個体の生が深く分裂していることを示しているのである。そこに政治国家に対する個の幻想性の問題が深く鋭く問われるのである。はたして「政治の

ユートピアは、死のユートピアを超えうるのか」。我々は唯一、闘いの中でしか、この人類永遠の問いに答えることができないのである。

#### <Ⅱ> 個的領域に於ける闘い

我々の出発点は「人間が語り、想像し、表象するところのものから出発し、あるいは語られ、思考され、想像される人間から出発して具体的人間にたどりつくのではない。現実的活動している人間から出発するのである。」というドイツ・イデオロギーによる指定である。我々が「人間の存在」を視点として出発する以上、個的領域に於ける、我々の問いは初期マルクスに於ける<法と秩序><個体の生>に対する総体としての根底的な問題に回帰する。すなわち、ドイテクの指摘「今日、我々をつないでいるのは歴史の抽象的理論ではなく、一つの社会に対する実存的嫌悪感である。」は人間の自然性が生活過程でも、意識的過程でも、農村の解体と工業社会の完成と成熟過程で不可避な転換をうながされつつあるという意味に於いて評価するのであって、単に疎外論と無媒介に結びつけ、意識的—無意識的に人間主義という抽象に短絡させることとは無縁なのである。我々が<生>と<死>の垂直分布の中で、実存的嫌悪感からの逸脱として、真の<生>の追求を行なわんとする時、個的領域に於ける闘いの序章が、切って落されるのである。我々を取り囲む個的領域に於ける価値感、倫理感が、自己の生活体験の中で対社会、対個人という対象認識の欠落の中で無媒介に作用された時、我々は自己の実存的嫌悪感を放棄している現実を直視できないのである。しかし<個>が自己の<生>を無媒介に表現し、それを止揚せんと意識し、行動する過程での外的規制が、自己の<生き



抜く>意識性を疎外と抑圧の領域からの脱去する方向性を示すのである。そこにはアブリオリ(第一義的)に<法>、<秩序>、<政治国家>が存在するのではなく、我々の指定した様にアブリオリには<人間>が存在しているのである。個が<法と秩序>により実存的嫌悪感を示し、<個体の生>が抑圧され、疎外される領域においては、<個>の<法と秩序>に対する根底的なパルパシオン(意義申し立て)がなされるのである。ここに於いて、法とは一義的に指定されるのではなく、歴史的な意味での人間との関りが鋭く問いかえされるのである。ベンヤミンは彼の暴力批判論の中で「議会主義が生きた諸問題の中で何に到達するかといえば、それは起源にも終末にも暴力をまといつかせた、あの法秩序でしかない」と言い続けて「法維持の暴力はかならずその持続の過程と、敵対する対抗暴力を抑圧することを通じて、自己が代表する法指定の暴力をもおのづから、間接的に弱めてしまう(中略)このことは新たな暴力か、あるいは先に抑圧された暴力か、従来の法指定の暴力にうちかち、新たな法を新たな没落にむかって基礎づけるときまで継続する」と続け、「いっさいの神的暴力、法指定の暴力—支配のといってい—は非難されなければならない」と結論づけている。すなわち、法が無媒介に存在するのではなく、まさしく政治国家に於ける、<個>の集合体の意識性の中で幻想として領導されているが故に、それに対置する<個>の生き抜く内容までも規定することは、まさしく暴力としての表現しれないのである。再度繰り返すとアブリオリに存在するのは人間であるが故に法は歴史的、哲学的に変遷し、破壊される存在なのである。現在、我々が狂歌しているブルジョア

法においても実質的には、人間の変革運動の中で、歴史的には、イギリス革命、フランス革命に於ける人類の血で洗う過程の産物であることを理解しなければならない。

### <Ⅲ> 個的領域と対象認識と価値分断

我々が個的な領域で<個>の生を指定してゆく中で個の発展的内容とは何なのであるうか?。すなわち、<個>が自己存在の主張の中で、いかなる擬制の<法と秩序>をも超越する存在である認識が位置づけられたとしても、<個>は超然と、自己の<生>を満喫できないのである。なに故ならば、<個>が、総体として、全社会的な意味での社会的なる属性を放棄しないかぎり、<個>は、基本的に関係の領域に自己を対置する必然が存在するからである。しかし、自己認識と、自己存在の欠落する、体験的感性的価値感の領域ではマゾ的に内的上昇する無意識しか存在せず無批判的な倫理、世界観が、むしろ当然のこととして横行する。そこには上述のごとく、客観的な社会的図式と、それを規定することによって、むしろ必然的に疎外され、抑圧される、<個>の生が存在し、その歴然とした事実我々は嫌悪と驚異を発するのである。そして、それを支える、現在のブルジョアイデオロギの擬制の共同体が醜悪な形で自己をむし食む構図の中で、ささやかな自己の<生>を、天賦のかけらのごとく細々と大切に主張するエゴイズムの集団に出くわすのである。この枠を突破するものは何か?。それは、確固たる自己存在に裏付けられる、実存的嫌悪感の発露であり、擬制の共同体に対する幻想としての価値利害と、個に於ける価値利害の亀裂の看破である。それは<個>の生を基軸とする対象認識過程に外ならない。我々が、基本的に結合している関係の領域が



いかなる形での幻想性を形成しているかについての根底的な、問いかけ以外にはないのである。かかる対象認識の中で、〈個〉の生から〈類〉の生に発展する論理的意識性と価値分断による、互いに対峙する内容が理解されるのである。たとえば、クラスはまとまらなければならぬという擬制の共同体に於けるドグマは、そこに於ける言語、意識性の中で了解される内容である。しかし、具体的な闘争の中にあり、露骨に〈個的〉な価値利害が表出される段階では、もはや、その様な擬制の意識性を支える何ものも欠落するのである。むしろクラスは、本来的な機能性という点で、その底辺を構成し了解されるのであって、何ら共有されるべき保証もなく、ただそこには、自己の〈生〉とはかけ離れた一度も極まられることのなかった〈自由〉〈平等〉等々のイデオロギーが、空しく残っているに過ぎない。対人関係においても、我々は、遊び友達、仲間意識は基本的に存在しても、根底的な対象認識と、価値の分断作用の結果の了解作用が、むしろ〈個〉と〈個〉の〈類〉としての幻想をそこに構築することによって基本的には存在するのである。

これら擬制の幻想を打破し、新たなる共同体を創出する過程は、単なる必然性のみならず二つの作用によって抜本的に行なわれる。1つには、権力による再編であり、もう1つには下部構造による広範な大衆の再編である。前者は、支配構造の体制ヒエラルヒーを頂点とする上部構造（政治）を基軸とする下部構造への直線的な再編であり、それは歴史的な課題と全社会的な意味での政治国家—市民社会（個の意識と存在）の価値の亀裂の止場としての、新たなる幻想の表現であり、その保証としてのブルジョアイデオロギーの貫徹で

ある。しかし、そのイデオロギーには基本的に資本と労働が指定されているが故に、本質的に階級的な内容を有し、その具体化は、より高度な資本主義への移行が、近代合理化とあくなき利害の追求がアプリアリに存在するが故に、プロレタリアートが市民社会の中で〈階級〉として疎外される存在として登場するのである。プロレタリアートは市民社会の中で賃金労働者として自己の労働力がこの社会の基本的生産力でありながら、商品としてしか外化できない存在である。労働生産物、労働過程で疎外される存在である。近代資本制社会では経済的に主体でありながら疎外される〈経済プロレタリアート〉と政治的に疎外される〈政治的プロレタリアート〉がありこれは共同社会の中では〈社会的プロレタリアート〉として表われるのである。ここで述べる社会的プロレタリアートは階級に形成されたプロレタリアートを意味する。近代資本制社会の生成と発展は内延的—外延的にも下部構造（市民社会）での労働力商品所有者の増大とあらゆるものの商品化であると同時に政治国家の幻想化（意識—観念の私的所有）である。つまり近代ブルジョアジーの側からすれば生産手段と資本の蓄積であるし、国家支配の拡大である。近代プロレタリアートの側からすれば、賃金労働者の拡大と、国家—法からの疎外の増大である。分業が拡大され〈私的所有—擬似共同体所有〉としての〈市民社会—国家〉の成熟過程なのである。そして内に国家として外に民族として自己を組織過程の成熟であると共にその不能性を予知する過程なのである。

そうであるが故に〈市民社会—国家〉の強調による社会フェシズムが外的には擬制的インターナショナルイズムによる〈国益—国防—



排外ナショナリズム>が広範に表われるのである。

#### <IV> 政治闘争への肉迫

後者における下部構造に於ける広範な再編は、個的領域の外延的な連続した直線上に位置づけなければならない。そのことは、すなわち、幻想領域（政治国家）への肉迫でしか語ることができない。なぜならば、自己存在の矛盾の止揚を単なる対象認識の枠内での自己否定に止まるならば、その限界性は明白だからである。自己の<生>と<死>の垂直分布を観念論的に止揚する以上、究極はニヒリズムが露呈し、単純論理による措定の問題で結局は円環をなす空論に短絡するからである。我々は、水平分布としての連続した時間によって外延的につながる政治との共有関係の中から空間を措定しないかぎり、このサーキットから外に飛びだすことはできない。政治への肉迫とは幻想としての政治国家と、自己存在としての市民社会を、下部構造に於ける全階級的な変革運動を開始することにある。

即ち1968年の東大、日大を頂点とする全共闘運動という新しい型での共同体の評価の問題である。そこに於いて彼らが事実において提示した自由な組織とその自由な論理は、全社会的な意味で驚異であった。即ちそれは高度に発展した工業社会こそがはじめて提示し得るものでなければならない。しかし、この運動の提起したはげしい問題提起に、よく耐え得るだけの高度な抽象性を供えた思想の形成が焦眉の課題である。そしてそこには権力を通しての鋭い自己否定の基盤形成がなければ到達できない未踏の無限の可能性を有している。それは連続した緊張関係の中での創造であるし、その止揚は、具体的な方針を何も示しはしない。しかし、個的な<生>の領

域に於ける生の措定から出発している以上、より人間的な叫びがそこに存在するのは事実である。しかし上述のごとく皮相な人間主義は意識的にしろ無意識的にしろ危険なことも事実である。垂直—水平分布の中に闘いの空間を設定し、自己切開してゆく、あくなき追求が、究極はその根底的な問題であると思われる。長き闘いは、非生産的な手工業性をも脱却させた。新たな闘いの共同体は歴然と我々の眼前に広がっている。自己存在を止揚し、真に闘いに決起する時、荒涼と広がる荒野のイメージが、確固たる意識性の中で強くとらえられるのを私は感ずる。

#### ※ （世界情勢の項、続き）

現在、沖縄の全軍労の24時間ストライキをめぐって日本—沖縄の階級情勢が再び流動化を開始した。しかし安保沖縄闘争を、日米関係や領土問題で扱っている傾向は上記の状況の中では、一切の普遍性を持ち得ないだろう。

中ソ国境問題、チェコ問題、世界共産党会議開催と緊張の続いている既成の左翼運動は社会主義国家体制—帝国主義体制という特殊な矛盾を普遍的なそれとして扱っているかぎり世界を把えつくす事ができなくて反動の役割を拡大再生産するだけである。ベトナム問題を民族問題として戦後世界体制の枠内でパリ会談によって解決する事は不可能だろう。

ともあれ70年安保闘争の渦中にある我々は、一人一人が世界認識と世界観をつねに問われている。「商品化」された「思想」が、かまびくしくささやかれる中では、すべての諸概念を古典をひきだして検討する事と同時に実践的に検討する作業をぬきにしては世界認識は不可能である。状況（世界）を把えつくす事は状況と緊張関係をもつことによって可能なのだ。



闘う自治体 — 電通大調  
布寮より

調布寮へのアピール

全国の学生、市民の皆様、電通大調布寮は過去5年間の寮闘争を闘い抜く中から、半年間におよぶ電通大闘争の中心的担い手として主体的に闘い抜いてきました。

苦しみの連続だった。12・20本館占拠闘争に決起する前後の約1週間ほとんど眠れない毎日だった。あの緊張、生きてる、生きてる、生きてる、この実感、打てば響き、答えられないことを許されない、偽ることを許されない緊張感が極限状態の肉体を支えてきた。

一切の幻想を払拭し、  
問題の本質をとらえ  
我らの生活に内在する  
すべての矛盾を看破せよ  
そして決起せよ  
そして決起せよ  
(1月9日 調布寮寮斗争委員会)

吹き荒れる暴虐の嵐の中、寮を基盤にした闘いは「生活の論理」の重

みをひしひしと感じさせた。闘争の直接的契機となった寮食堂においては、大学当局の自治破壊攻撃に抗して自主管理運営の原則を貫徹することが我々の「メン」と対立してきた。新入生の入寮に関しても「寮委員会の選考で入った者は退去させる」等により今だ小人数しか入寮しておらず、調布寮の存在そのものが危機に瀕している。

しかしながら我々は長い苦しい闘いの中で明確に確認している。すなわち、『自治とは闘う中にしか存在しえない、闘う実体こそが自治の基盤である。』

奴隷を解放した力は何か、封建領主を倒し自由を獲得した力は何か、労働者がスト権を獲得した力は何か、すべて被抑圧階級の血と汗との闘いではなかったのか。

現在平和、自由、民主主義などの美しい言葉があたかも絶対的な力を持つかのように氾濫している。しかし不幸にも（あえて不幸と付け加える）戦後日本人はそれらの言葉の幻想を与えられた、または、あの忌まわしい戦争体験に対するアンチテーゼとしての「理念」から設定されたのだ。このことから不可避的に「平和憲法」「議会制民主主義」などは無媒介的に良いものだ、と思い込み、



それらを自らの力で闘いで守り発展させることが、それらの「形式」「形体」を守ることと二重写しになり「俺は民主的進歩的な人間なんだ」と思いこんでいるのではないか。その中で何が行なわれ、何が行なわれんとしているのかを一切、捨象して、あるいは二の次にして。

我々の闘いは今後も一貫して続けられるであろう。人間を厳しく見つめれば見つめる程、主体的に生きようとすればする程、現在の議会制民主主義、法、秩序、道徳、規律などによって本質が陰蔽されたブルジョアイデオロギーを媒介に市民社会から圧殺されてくる。—メカニズムが働いている限りにおいて……。

「形式」「形体」はあくまで真に問われている内容に最も適した形へ常に動いていくべきものだ。自己が課題にどれだけ主体的に関っているのかを再度問い返すべき時点ではなからうか。そのことなくしては人間存在の問題云々を語る資格はないだろう。「俺は現秩序、体制の範囲で主体的に生きて行く」これほど欺瞞的な言葉はないであろう。

今年の調布祭は闘いの中で行なわれる。我々はできればバリケードストライキの中で行なえることを望んでいる。過去の調布祭が、理念はど

うあれ、テーマはどうあれ、実体は総体として「行事」「若さの表現」、興味本位の域を脱しえなかったことを否定的に総括する中で自己と、それを規定してくるところの社会的存在の関係を人間存在の全領域で把握していく一つの契機として位置付けたい。

我々は我々の秩序と空間と時間を実践的活動を媒介に闘いの中から築きあげていく生き生きとした調布祭を勝ちとろうではないか。



## 短大実行委員会 アピール

第19回調布祭はまさに変換期に立たされている。過去の調布祭の総括の上に真の大学祭へ向けて新たなる前進を勝ち取るべく、今こそその本質を徹底的に追求して行く時ではないか。我々短大生として、まず自己のおかれている立場を明確に認識し、確固たる主体性を持って第19回調布祭に参加することを期待する。

短期大学は、昭和25年当時の趣旨によれば戦前の専門学校で新制大学へ昇格できないものを整理するための臨時的処置として発足したものであった。ところが、その後の大学大衆化の中で、文部省は「短大を大学の一種として見なすことはおかしい。四年制大学とは別個の目的を持った高等教育機関とする。」という見解をもって、大学の階級形成化行政のもとに、又、私立大学のブルジョア教育管理者による突き上げ等々により、昭和30年6月19日をもって短大制度が恒久化された。この恒久化の事実により、権力支配者は大学の階級的格付に着手し、現在の観るならば、大学の目的化—大学院大学、中級技術者養成大学、教員養成大学—を押し出すことにより更に階級形成を計っている。

労働者自体が商品と化す資本主義経済社会での大学を含めた教育過程は、労働力の再生産過程としてあり、同時に資本主義体制に応じたものとして必然的に資本主義機構の高度に発達した体制である帝国主義的再編、支配秩序への組み込みを計らなければならない基盤を持つ。そして現状の教育が自己=学生の商品価値を高めるものとしてのみ存在している。

一般教育の重要性を言明しつつ、その物質化された実体は時間数の不足による一般教育の質、量の疎弱を生じ、その疎弱さをカバーすべく専門教育へと重心を移すことにより一般教育の更なる疎弱を生じ、専門教育へと更に重心を移す。これらを巧みにカリキュラムの中に陰蔽し、「完成教育機関」というイメージへ上昇させている。この職業に直接役立つ専門教育の密度を増すことにより、短大の本質は職業訓練所と化した。大学は労働力再生産の立場として位置づけられると同時に、真理の探究の場としての教育、学問研究という二面性を持っている。しかし、短大においては現実の外力によって学問研究が変質されその形骸を留めるに過ぎないものとなっている。これらは短大設置基準から明らかにされるように、労働力再生産過程としてのみしか大学のありえなくなった事の現われであろう。資本主義産業側の技術の高度化に答えるための高度化に答えるための基礎専門教育科目の増加。授業時間の大半を増加により教室、教官の不足に拍車をかけることによるマスプロ化。教員資格の拡大と、単位制による各短大独自のカリキュラム構成の不能等々による教育の統制化。能力主義を押し出し、それを支点として「限られた労働力をいかに有効に配分化するか」のもとに、学園の合理化を伏線として「人づくり」は「マンパワーポリシー」の政策のもと経、産業界に見あう労働力を再生産することを指すのである。

そして卒業することでブルジョワ的所有に自己を位置付けするという幻想性を持ち、社会体制内における被支配階級を脱出しようとするが、現実には労働者を搾取しつつ資本家から搾取される二面性を持つ中級技術者として社会に放出される。この事を否定する方向性



を持つには自らが意識の変革及び自己を規定する枠をはみだす時であり、自らが自己を否定しなければ実践行動には移りえない。我々は現実の諸状況を認識する程、後退を強いられざるを得ない疎外された自分を直視しなければならない。

以上、短大の矛盾した現状について述べてきたが、それは政府＝文部省の大学支配に対する露骨な介入以外の何ものでもない。戦後民主主義の「平和と民主主義」による教育は善良たるべき市民としての教養を与える反面中高技術者の養成を意味していた。そして朝鮮戦争後の日本資本主義社会の再建を維持すべく小中高教育の体制化に成功した政府＝文部省は、60年代に至り大学に矢を向け、着着とその準備を進めてきた。現在、その支配を貫徹すべく様々な攻撃を我々に対しかけてきている。政府＝文部省は大学支配、教育の帝国主義的再編成においては、日本帝国主義再編成の生産基盤の強化と、その生産構造を維持すべく、教育による物言わぬ労働力の確保を目的とする。労働が商品としてしか価値を持たない資本主義商品社会において、教育過程を労働力再生産過程として確立すべく国家権力の教育支配貫徹を我々は断固粉碎しなければならない。また、教育の帝国主義的再編成の一環としての短大設置基準を粉碎する任務を我々一人一人が義務づけられている。大学を「営造物」の名で「労働力再生産工場」としては、どのような手段を用いても徹底的に弾圧して行くという中教審答申の骨子をみるまでもなく、我々はすでにその実験台に乗せられてきたではないか。中教審答申実質化路線を地を地いく岡田体制の中、2・27機動隊導入以降、一ヶ月半にも及ぶ学園ロックアウト、立看の禁止、デモの禁止等々の様々な

弾圧はもはや日常化している。しかし、どのような秩序を型造ろうとも、秩序を乱すとしてどのような弾圧が加えられようとも、その中に本質的の矛盾を含むものがある以上、闘いは必ずおこるし、闘いは必ず勝利する。

現在、政府文部省の手で着々と進行しつつある大学立法は、その巧みな陰蔽策も間に合わぬ程露骨に我々に対する支配、弾圧のキバを剥いている。学園斗争の本質的解決を計るのではなく、自己の矛盾を見抜かれぬための学生対策として、そしてその対策に大手を振って国家権力が介入してくる事により、まさに治安立法としての性格をこの立法は持っている。我々はこの大学立法を粉碎していかなければならない。学生が被害者だから闘うのではなく、この立法が人民への加害物としてあるからこそ闘わなければならない。

この様な状況の中で第19回調布祭が決行されることは真に意義深いことと考える。我々は評論家的思考におちいることなく、大学の本質的問題を徹底的に追求し、この調布祭に反映させようではないか。

全学友の主体的な参加を要請する。



# 催物日程表

21日(土)

22日(日)

	B棟	学館	B棟	学館
10:00				
11:00				
12:00				
1:00				
2:00	講演 演	座談会 E S S 小集会室	講演 演	囲碁 十傑戦 小集会室
3:00				
4:00	講演 演		講演 演	ダンスの集い 舞研 大集会室
5:00				
6:00	講演 演			
7:00				



## “叛乱”の思想

— 60年から70年へ —

長 崎 浩

我々は今70年闘争への進撃を開始している。しかしながら我々が70年において闘わなければならないものは果して何であるのか単に権力のスケジュールに従った闘いとしてではなく、それ以上のものを意識的に提出していくとしたらそれは何でなければならないのか、我々は今それを我々の歴史を深く総括する中から見出していく必要に迫られている。

反安保闘争の高揚と敗北と共に始まったこの60年代において、たしかに状況は大きく推移した。一昨年(1978)の10・8羽田闘争が切り開いた状況は我々の闘いに全く新たな質をもたらし、全国の学園に燃えひろがった闘いはそれまで不問に付されていたものの意味を問いなおす事を要請している。

しかしながら、そこで問題となっている事は全て60年闘争がすでに提起していたものであり、それが現在より鮮明な形で露わになっているのだとい切ってしまう事も不可能ではあるまい。

60年闘争は「平和」と「民主主義」を擁護する闘いとして形成されてきた50年代後半の大衆運動がその頂点まで登りつめる事によって瓦解していく過程であった。

そして又、そのような運動の限界を止揚すべきものとして登場した全学連の闘いも様々な可能性をその内にはらみながらも権力の厚い壁にぶつかって四散していくより他なかったのである。

そこにおいて思想的に問われていたものは

封建的なもののアンチとして日本の擬制的な前衛までもがそれまで依拠してきたブルジョワ的近代をどのように把えそして超えていくかという事であった。

60年当時においても、それまで左翼の思考・行動の一切を呪縛してきたスターリン主義から脱していく過程で疎外論＝主体性論、宇野経済学等の個別学問的な業績はたしかに存在した。しかし“近代的世界観”の超克そのものを課題とする理論的作業は60年代も終わりに近づいてようやく開始されたという事ができよう。

そのような試みの中で『叛乱論』(合同出版)として結実した長崎浩氏の理論活動は我々に様々な問題を投げかけてきている。氏は60年闘争を指導的メンバーの1人として闘い抜き、敗北後の混迷の中にあっても60年の意味を問い続けてきた。そして東大闘争の渦中に於て助手共闘の一員として闘争を担いながら“近代”と対決すべき“政治”の性格についての本質的な考察を提起してきている。

我々はここで氏と共にあらためて60年闘争及びその後の状況の推移の意味を考え、“政治”の意味を問いなおす事によって70年闘争を闘い抜く自らの政治論を形成していきたいと思う。



講演

## 沖繩独立の思想

森 秀 人

沖繩の現実是我々の戦後史の影としてあった様々なものを指し示している。普遍的な価値の体现者として崇められてきたアメリカがどのような醜悪な手段によって自らを支えているのか、そして“本土”の大衆の安易な被害者意識など冷たく拒否するであろう“本土”によって抑圧され続けた歴史の重みを、そして何よりも“日本”の反体制運動の歴史的に蓄積されてきた誤謬が集中的に表現されているのだ。

復帰運動として闘われてきた沖繩の闘いはそれ自体大きな矛盾をはらんだものであった。何故ならば沖繩はアメリカの暴力によって植民地的に支配されているのではなく、1952年のサンフランシスコ条約によって日本の領土権を確認した上で、日本の手で合法的にアメリカに売り渡されたのであり、そして又、独自の文化的伝統を持つその共同体を蚕食し続けているのはアメリカの軍事基地ばかりでなく、日本の独占資本でもあるのだから。

それ故“日本”をひたすら美化し、それへの復帰を請願う事によって沖繩の矛盾は決して解決されるはずはなく、“本土”の歴史的责任を追求する事によってそれから断絶する事なしには、その解放はありえないのだ。

しかし、それは沖繩がアメリカの東南アジア侵略の最重要拠点である事から、日本には被害者としての立場にあっても東南アジアの民衆に対しては加害者の関係を持たざるをえないのであり、それ故トータルなアジア革命との関わり、連帯なしには不可能なものとし

てあるであろう。

現在、沖繩が70年闘争の課題として我々の前に大きく登場している。しかし沖繩が今まで我々の視野に入ってきたのはどういふ事なのであろうか。我々はその事を問い、そしてそこに我々の戦後思想あるいは戦後大衆運動の本質的な欠落部分を見出していく事なしには沖繩に加担することはできないのではないか。

それは単に道義的なだけではない。我々が今、復帰とか返還とかを口にする事は我々自身の戦後史における敗北を再びくりかえす事であり、又、その敗北を沖繩に押しつける事になるのだ。

森秀人氏は1962年沖繩にわたり、自ら現地の闘争に参加し、又闘争を組織していく中から「沖繩解放論」を中心とする『甘蔗伐採期の思想』を書きあげた。そして現在、次のように述べている。「僕があの本で書いた問題は少しも古びていないし、その意味では現在の過程はあの本で書いた予言が実現している過程だと思う。」(『日本読書新聞』3・24)  
森 秀人氏 略歴

1933年東京生、元『思想の科学』編集長  
著書 『反逆の文学論』 (三一新書)  
『甘蔗伐採期の思想』(現代思潮社)  
『大衆文化史』 (産報)  
『遊民の思想』 (虎見書房)  
『折 伏』 (産報労・共著)  
『青春・暴力』 (芳賀書店・共著)

その他



我々が天沢退二郎氏について知る所は詩人としての氏と「造反教官」として明学大で斗っている氏とであろう。この一見氏の一面を表わすかに見える「詩人」「造反教官」とを結びつけているものは一体何なのであろうか、氏の内部においてそれらはどの様に結びついているのであろうか。この事は氏の『さむい朝のはじまり』に対する北川秀の次の様な指摘にもあらわれている。『…………生活社会が意味や論理としてもつ虚偽や整理整合された文法のギマンから、詩人が自由でありえようとする時、詩人はどうしようもなくこのような<夜明け>をむかえねばならないのであろうか。そしてこうした<朝>を恐れず選びとってゆく天沢氏のラジカリズムは、またすぐれて論理的な態度だといわなければならないであろうけれども、ただ驚愕した家々の幽霊

明学大 天沢退二郎氏

がさけられず生活社会の論理をつき従えて進んできた時、そしてまた天沢氏自身も、その半身を「家々」に居住させねばならない罪を負っている時、そしてそれらを避けられず問題にしなければならなくなった時、天沢氏の<朝>の変貌がどのようにしてあらわれてくるか…………』

電通大教授連の例を見るまでもなく専門バカ・体制内高揚学者が圧倒的に多い中で氏が「造反教官」としての自己をどの様に位置づけておられるのか。またそれは氏の文学とどの様な関連性において結びつくのか、この点について話していただくつもりであるが、氏との連絡等がうまく行ってませんので特に演題は設定出来ませんでした。当日もしくは、それ以前になんらかの形で発表致します。



## 反 大 学 論

清 宮 誠 氏

1968年以後の東大一日大を頂点とした全国の大学斗争は、これまでのそれとは明らかに異なる規模と質をもって展開された。その特徴を幾つかあげると第1に学生達の現代社会に対する新しい転換の要求であった。現代大学の矛盾は現代資本主義の矛盾であり、それなりに大学斗争も社会的政治的性格をもった教育斗争といえるだろう。第2に特殊な個別課題の追求に始まった全国の大学斗争も現行大学を構成している原理体系と全面対決せざるを得なかった。つまり現代の独占と国家による大学支配の真正面からの対決を意味した。第3に「“学問研究は真理であり、超階級的である”という既に乗り越えられた思想にしがみついた教官を徹底的に批判していくと共に、我々自身、科学技術者の主観的願望と客観的役割との矛盾と、それにもかかわらず科学技術を開發する自分の分裂を見つめ、科学技術者の存在を批判的に検証し、その矛盾を根本的な所まで推し進めてとらえる事こそが意識的に追求されなければならない」（青年都市計画研究者連合）これに明確に表現されている様に大学に於ける学問＝研究の本質的性格を全面的に問うものとして「文化の革命」「知性の革命」としての性格を強くもっていた。

我々はここで教育＝研究体制の改革の問題を検討しなければならないだろう。現在の講座制（広く現実の研究＝教育体制一般）は大学の本質的機能たる「批判」機能を喪失し、

又学生・院生の自律性・創造性を奪っている。それは現代の個別化された学問が現代資本主義の要請に応えるべく構成されている事、科学研究者が体制から見離されては出来ない自己の研究活動遂行の為に体制内研究テーマを選択していく事によって自らを自主規制していく事などに明白に表わされている。

我々の学問は、現代社会の具体的には資本家の要請する現在の学問ではなく、我々自身が求める学問、人類全体を解放して行く、あるいは歴史を發展させていく学問でなければならない。その為には学問＝研究を含めた真の自治活動の構築、それを可能にする研究教育組織体の構築、そうした組織への全国全共斗（就中、電通大全斗委）の自己形成が人間解放のガンと成っている講座制の解体を可能にするであろう。単に現行大学管理機構の改革を問題とするだけでなく、教育＝研究体制の根本からの改革運動（電通大全斗委に欠落）をも遂行していく様な組織体として全斗委の再編強化が現在のせまられている状況ではないだろうか。この様な闘いの方向性をもって、電通大に於いて自主講座運動（単に講演としてではなく）を展開していく事が必要ではないか。

そして、この場では暴力的大学支配として存在していた古田体制下で、そして現在、清宮氏がどの様な視点からどの様な方向性をもって学問を遂行しているのかを、話して頂き共に考えて行きたいと考えます。



6月22日 4:00～7:00

## 四連協主催技術論シンポジウム

我々は今7ヶ月以上に及ぶ電気通信大学闘争の渦中に調布祭を迎えようとしている。

12月20日の本館封鎖以来我々に露呈されたものは「大学の自治」「学問の自由」の名のもとで行なわれている腐敗と墮落であった。それは委託研究や自らの特許の為の研究を臆面もなく行なう教授に端的に示される学問の私物化であり、教授が自己を管理者と意義づけ強圧的なカリキュラムをマスプロ教育でおしつけてくる産学共同路線であり、又、我々に抑圧的寛容をしいる国大協自主規制路線であった。そして我々はそのような電気通信大学の学生としての自己を厳しく問い返さなければならなかった。我々は技術者としての養成課程にある者として、決して1個の人格としてではなく、自己の主体性を疎外された形で能率のみを追求したりカリキュラムに従事させられてゆく、そしてそれは自己を知的エリートとして意義づける幻想のもとに進行してゆくのである。

現在電通大は7ヶ月に及ぶ闘争を捨象した形で機動隊を背景にして情況と無関係に「研究の遂行」「教育の遂行」の名のもとに12月20日以前に帰ろうとしている。我々はそれが「民主主義の名のもとで行なわれることを見落してはならない。まさに戦後日本の社会構造の歪は機動隊に象徴される政府の暴力装置によって作り出されたのではなくブルジョアイデオログによって骨抜きにされた擬制としての戦後民主主義そのものがはぐくんでき

たのだ。そして我々はそのような戦後民主主義を生の内容としてもっているのである。今我々が対決をせまられているのはまさしく我自身が生の内容であり、我々の焦眉の課題はその内部矛盾の止揚である。そして我々自身は遅かれ早かれ技術者として社会に出てゆかねばならない。我々は「富と繁栄」の名のもとで近代技術が対象を自然のみにとどまらず人間をも対象にしていること、すなわち労働主体をも生産工程の一契機としていることを知っている。

近代技術は今や支配者階級、すなわちブルジョアジーの生産手段として受身的に位置づけられるのではなく、もはや能動的に資本主義をささえるものとして積極的に人間の疎外をもたらしていることを知っている。我々は技術そのものをあらたにとらえ返す中で自己を情況の主体としなければならぬし、そうするだろう。

ふたたび死のちかくにいる季節よ

ぼくたちの分離性の意志が塵埃にまみれて  
生きている

労働は無言であり刑罰である

未来のことがなにもひとつ視えないとき

ぼく達の労働はしいられた墓掘りである

ぼくたちの疲労のほかにはぼくたちをたしかめる手段はない

苛酷はまるで呼吸のように切迫する

速くまで世界はぼくたちを檻禁している。

(吉本隆明)



## クラス・サークル企画

聞け、混迷の期に渦巻く初夏の詩を！

### 放送研究会

我々放送研究会は今年の調布祭を、電通大における全ての学生にとって明日への躍進の礎石たる存在とするべく、積極的にこれに参加し、文化運動サークルとしての我々の活動ベクトルがひとつの可能性に矢印を向けていることを示すつもりである。その意味で、我々は現在の混迷した社会状況にあって、様々な人間を浮き彫りにする中で、真に求めべき人間性を探究している。従って、今年の放研の参加テーマにみられる「詩」とは単なるポエムをさすものではなく、混迷の状況において発した人間の叫び声、即ちそれがそのまま文化の源泉となりうるエネルギーを結集した文化運動体としての「力」そのものをさすのである。そして我々はその力となりうる有効的手段を“放送”というメディアに求め、不断の活動をしているが、大学祭においてはその活動を何らかの形で集合化したものとして発表していく。その発表形態は、記録性を重視した録音構成や、芸術性を追求したドラマ、あるいは娯楽性を加味したD・J等々、あらゆるジャンルにわたって、B棟にサテライトスタジオとモニタールームを設け、ここで発表するつもりである。特に、電通大斗争

においては斗争が起きてから6ヶ月にわたる今日まで、一貫してこれを取材し報道してきたが、その総体としてドキュメンタリー「電通大斗争の記録」を放送する。これは録音テープ巻数だけでも150巻、録音延べ時間にして130時間を越える莫大な取材量であるが、その編集においては放研がその全責任をもってあつた精魂ある記録である。そして、斗争関係の資料全部をモニタールームに公開することにより、この斗争の「真実」と「本質」を明きらかにしていくもので、全大学人が必見、必聞せねばならないものである。そして、現在我々のおかれている状況を正しく把握することにより、いま何をなすべきかをこれらの作品と展示等を通して、我々と共に討論を繰り広げようではないか。

### 安保体制下のアジア

#### アジア学生技術会議

諸科学、諸技術の驚異的發展は産業の高度化、独占化をもたらした。生活資料の増大、変転は我々の生活をかつてなかったほど豊かなものにし、我々をして数年後の世界を想像することができないほどである。他方では、産業の高度化がストップウォッチで追いつられる単純労働者を生み、合理化による多数の失業者を生み、産業公害は人間の生命をむ



しばんでいる。人間性はますます疎外され、すべてのものが物質化されていくかに見える。アジアに於ては先進国の繁栄をよそに飢餓と貧困、そしてベトナム戦争に象徴される幾多の反政府、反植民地的動乱が、帝国主義的侵略に抗するものとして生じている。

この相対立する状況の中で日本の繁栄が叫ばれている。そしてこのイデオロギーがすべての非人間的政策を正当化するものとして存在しているのである。

アジア、そして日本にかけられた安保体制はアジアに対する帝国主義的政策の基軸としてある。日米安保条約を独自に評価することはできない。世界的な集団安保体制の一環として位置づけ、戦後、唯一イニシアチブを握ったアメリカの世界政策のもとに形成されたことを考えなければならない。「国防」「日本の繁栄のため」などという擬装的イデオロギーを払い棄て、安保体制のもつ真の意義を論じていきたい。

1970年の日米安保条約の再検討期を1年後に控え、我々は、選択と闘争への決断をせまられている。沈黙はゆるされない。

60年安保体制を再度評価し、そしてその中から生まれた、羽田、佐世保、王子、成田4・28沖繩デー、AS PAC闘争等の総括を通して、さらなる戦列の構築を考えていきたい。

## 「追放、同化、抑圧」に対する闘争

### 韓国社会文化研究会

日本政府は、在日韓国人に対して民族的偏

見、差別をもって弾圧、抑圧を過去から一貫として繰り返し堅持している。1910年の韓日併合以後の朝鮮侵略は、言葉では言い尽くせぬものがあった。それは次の初代総督寺内毅の言葉である「朝鮮人は我が法規に服従するか、死か、そのいずれかを選ばねばならぬ」が象徴する如く、完全なる武断政治を強いたのである。それから1945年の日本帝国主義の崩壊まで、日本帝国主義、日本独占資本の奴隸的存在として、日帝は朝鮮を位置づけるが如く、振るまったのである。それにもかかわらず、またもその過去と同じ誤ちを繰り返すが如く、日本政府は在日韓国人に対して「追放、同化、抑圧」政策を表面に打ち出している。その偏見、差別政策を立法化で正当化しようとしているのが、出入国管理令改悪である。これは今年度通常国会では、入管法は治安立法であり、世界でも名だたる悪法であるという理由から、野党や外勢力の反対により審議されなかったものを、自民党はハレンチにも延長国会において単独強行採決も持たずという態度を表明している。

この入管法の主旨は、在日韓国人の在留活動を大幅に規制し、同化（帰化または精神的日本人化）せずば、強制追放ということにもなっている。また「外国人学校法案」は民族教育を治安対象としているのである。このような日本政府の在日韓国人に対する弾圧を歴史的背景からとらえ、いかに不当なものである、基本的人権すらも奪っているかを明らかにするつもりである。そこから発展した形で、民族的主体制へのとつた「南北統一」を考えていきたい。最後に進歩的電通大生がこの闘争に主体的に行動することを期待する。



## — 公開実験 —

### 工 学 研 究 部

授業において、講義との関連の理解しにくい実験の経験しかない学生が多いためか、工学研究部における日常的活動の中においても科学的思考における実験の意義は十分に認識されていないように思う。この点を反省し、また、単に解説のみに終らずだれもが自分自身で試すことのできる実験にした。内容は、超音波、バイオニクス等。

### 考 古 学 の お も し ろ さ

#### 考 古 学 研 究 会

電通大のキャンパスに、機動隊によって踏みじられたヘルメット、曲った鉄パイプなどは、国分寺周辺で発掘された武蔵国の郷名を示す極印などと同じように考古学上のデータである。考古研が前者を研究していないのは印刷物や目撃者の話という十分な知識源をもっているからである。そういった知識源のために電通大闘争が示した遺品は、まっとうな歴史の中にくみする価値がないようにみえる。しかし、かりに月に人間が住みつき、やがて月の質量が増しつゝには北半球に焼け落ち、あらゆる文書記録を破壊したと仮定しよう。南極育ちの考古学者が現在「日本」とよばれている土地の歴史をさぐる時、コンクリートの上層から出てきたこれらの遺品をも頼

らなくてはならないだろう。考古研の存在まではわからないであろうが。

悠遠な古代を探る考古研は、考古学のおもしろさを基底に、横浜市の磯子附近における遺跡存在の可能性、府中市にある堅穴住居址の一考察、の二点を考えてみたいと思います。

### Through The Lens

#### 写 真 研 究 部

今日の社会状況を見てもわかるように、大学問題は、根本的にねざしている点から起るベクトルの増大と共に、今のところ足ぶみ状態です。

我々電気通信大学写真研究部は、そのような状況を把握しながら、本館占拠によって表面化された電通大の学園問題を的確にとらえ、又、電通大の一員とし写真を愛する者として主体的に取りくみこの調布祭で発表します。

それに写真展において、上述の写真の他に写真研究部全員の自由課題による個人作品を自信をもって展示します。なお、この作品は部員の一年間の創作活動の総決算というべきもので、きっと皆様の目にとまることと思います。御批評をお待ちしております。

一方、恒例の写真研究部主催のモデル撮影会を行ない、調布祭を盛りあげていきます。撮影会は学内で行ないますから、学友及び一般の方々の参加を大いに期待しています。



## 美 術 展

### 美 術 部

つゆの、じめじめした陰気な毎日はいやなものです。しかしこの陰気な毎日にも大自然の中には来たるべき夏をめざして、降り続ける雨を黙々と養分として吸い上げているもの達があります。それは野山の木々であり、道ばたの雑草であり、そして電通大の北端にたむろする我ら美術部員であります。

しかしながら以前の我らが美術部には、このつゆの長雨を来たるべき夏のための養分として吸い上げることができるほどの元気はありませんでした。ただ自分の無力さを嘆き、自分で自分に対して腹がたち、自分の穴の中に、ただただ閉じこもっているだけでした。「これではだめだ。自分のまわりにあるものは毒であれ、なんであれ、貪欲に飲みつくし、吸収して養分に変えてしまおうじゃないか。そして真夏のコバルトブルーの空は自分達で引っぱってこなければならぬのだ。」という気分がしたいに盛り上がり、ここに部員一同、力を合わせて調布祭の美術展を開催したわけであります。

作品の中には、じっくり何ヶ月もかけて描き上げたものや、感情のおもむくままに、2～3時間で一気に描き上げたものなど、また消しては描き、描いては消し、さんざん苦しんだあげく、ようやくでき上がった作品など様々ですが、これらの作品は全て我々の繊細な(?)、感じやすく(?)、激しやすい(真実)、そしてちょっぴり(相当)無神経な感

覚をフル回転させて創り出した産物です。

御高覧のおりには一言でもけっこうですから、ぜひ批評なり、感想、注意なりを御教示下さい。

その御言葉も我々の養分として、ぐいぐい吸収させていただきたく御来場をお待ちしております。

## 「全 米 総 会」

映画，展示

東洋思想サークル

断絶の時代とも混沌の時代とも形容される現代。その最も象徴的な姿が、日本の、そして世界の大学内部において顕在化している。本質的根本的な問題を提起する彼ら学生運動家。それに向い対処しえず、ただおろおろするばかりの教授達。その解決は絶望的な様に見える。それは文明という次元まで掘り下げて問われなければならぬ問題だからである。現代において西洋文明それ自体が問われているのである。このカオスに光明を投じ、明日の世界への道標となる思想哲学はいづこにあるのか。「ミネルバのふくろうは夜飛び立つ」という格言がある。この混沌とした現代においては、どんな所に解決に導く真理がころがっているかわからないのである。ここにおいて我々は東洋哲学の心髄である仏教を根底とした団体・創価学会に注目した。世界民族主義をかかげ世界平和を唱う創価学会、その実践の姿がこの「映画・全米総会」である。



## ラリー講習会

### 自動車部

毎年、調布祭の一行事として「調布祭ラリー」を主催してまいりましたが、本年は、諸般の事情により、講習会に変えさせていただきます。「調布祭ラリー」の方は、十二月に行なうべく準備を進めておりますので宜しくお願い致します。

さてラリーにも色々な種類があります。サフエラリーやアルペンラリーなど皆様も御存知でしょう。ものすごいスピードで泥道や山岳道路などを走ることなど、誰でもやってみたくになります。しかし、学生ラリーではスピードを競うよりも、時間通りに走ることが要求されます。与えられた指示速度通りに走り、チェックポイント間の標準時間との差が減点となり、減点合計の少ないものが優勝するわけです。速度を変える地点も看板や標識で示されており、又、走るコースも交差点やわかりにくい所を書いたコース案内図しか渡されませんから、助手席に居るナビゲーター（案内人）の仕事は、計算、積算と同様に重要で、あとドライバーを含め、四者が一体となってラリーは成り立つものです。

さてこの「講習会」を機会に、ラリーに少しでも関心のある方やラリーに出場したいと思っていられる方々は、どうぞ御参加下さい。ナビゲーター、計算、積算などと、ラリーは少々堅いよう思われますが、やってみると仲々楽しいものです。

なお「講習会」には、我クラブの優勝経験

豊富なベテランが説明致しますので、必ずや得るところがあると思います。

ぜひ一度御出かけ下さい。

### 座談会

21日 2:00~5:00 E S S

現在世界各国に於て、その目的とするものは異なるが種々の大学問題が発生している由がマスコミ等に報道されています。本学に於ても大学問題に直面していますが、その中で教授と学生との信頼、又は学生相互の信頼に少なからず疑問が投げかけられています。その中であって、我々ESSは英語を話す関係から人間相互の関係を重要視しなければなりません。更に我々は英語に慣れ親しむと共に英語国民の持つ相互の連帯及び信頼等についても触れる機会を持っています。故に今回の調布祭に於てはESS独自の方法で大学問題を、信頼及び連帯等の面からアプローチしてみたいと思います。他女子大ESS、外人講師を招きディスカッションを行なった後、更に親睦をはかる為にフォークソング等を皆さんと共に楽しみたいと思います。

### 大学闘争と戦後教育政策

E棟経営演習室 全経営工学科

我々は昨年十二月以来この電通大において「学生の良識」に従って闘争を続けてきた。我々は一箇の人間として現在何が自分の生活、



意識を圧迫しているのか、その「悪の力のカプセル」は一体何なのかを探究しなければならない。

そして「悪の力のカプセル」を自分はどうのようにして粉砕していくのかを考えねばならない。

現在スト中だからみんなといっしょに授業を受けないというような闘争への参加のしかたではなく、自分にとって大学とは何なのか、しからば電通大はどうなのか、権力機構はいかなる力で自分を圧迫しているのかを考えねばならない。以上のことをはっきりと総括した上で自分のとるべき方法を決定し、はっきりとした態度で闘争に参加すべきである。

## 調 布 囲 碁 十 傑 戦

### 囲 碁 部

調布囲碁十傑戦、今年で第4回を重ね、やっと定着してきた感があります。現在調布囲碁界には、市民囲碁大会等々の大きな催物があり、もちろん規模は及ぶべくもありませんが、本戦は十傑戦形式で、調布十傑を決めるユニークな大会で、そのレベルは勝るとも劣らないと思います。この大会は調布祭の一環として行なわれ、力の向上と共に合わせて市民と大学囲碁部との交流をはかりたいと思いますので、多数の市民の方々の出場を希望致します。なお試合は、十傑戦でありますので、オール互戦（黒五目半のコミダシ）によるトーナメントで十傑を競い、一位より三位までは盾を、十位まで、賞状を送りますので奮って御参加下さい。

## “ ダ ン ス の 集 い ”

### 舞 踏 研 究 部

“ダンス”というと、フォークダンスやゴーゴーを思い出したり、しかめっつらをする人が、まだ日本では多いようです。

そこで我々舞踏研究部では正しい社交ダンスを広く普及する目的でダンスの集いを催すことになりました。

無線やエレクトロニクスなど、とかく硬くなりがちな調布祭に於いて、ただ一つ花を咲かせるダンスパーティー。美しいダンスミュージックにのって、ダンスはいかがでしょう。まだダンスを知らない方も是非いらして下さい。美しい女子部員が丁寧にお教えしましょう。もうご存知の方は大いに楽しんで下さい。

日曜の午後、他の催しをご覧の後は、皆様お誘い合わせの上、ご来場下さい。

日 時 6月22日(日) 1~7時PM  
場 所 学生会館大集会室

### ノールウェースタイルの

### ゴーゴー喫茶

1 P

抜群にイカしたノールウェースタイルのサイケなゴーゴー喫茶。シビれるようなロックを存分に味わおう。悲しいほどにすばらしいロックバンドの演奏も予定しています。

来ないと一生の損になるよ!



## 喫茶「岳子(たけの子)」

写真展示

山 岳 部

厳しい生活環境では自己が完全なる主体となるとともに、各自がその全能力を投入することが要求される。しかし各々のベクトルの集大成されたものが最大となるためには、ある方向へ方向付けられなければならない。そこに登山という作品が創造される。しかし、その作品も各自のパーソナリティの溢れでたものでないと味けないものとなる、その意味で登山は芸術的生産である。各山行におけるその成果と、生味の人間性の触れ合いを紹介するとともに、色々な分野の人々と山について、あるいは諸々に付き共に語り、何らかのものを得られれば幸いと思います。

## 音楽喫茶「しんこべいしょん」

管 弦 楽 部

調布祭にはなつ大ヒット。生演奏と高級ステレオ装置によるレコード演奏の音楽喫茶。「しんこべいしょん」はいかがですか。我がオーケストラのトップメンバーによる独奏や合奏の数々があなたを魅了し、素晴らしい再生装置によるレコード演奏が、あなたに、いこいのひとときを提供します。是非どうぞ。さてついでに部のコマーシャル。今年の12月には、12回目の定期演奏会を開くまで成長した電通大のオーケストラです。部員の半数

以上が未経験者で、誰でも気軽には入れるのがこのオーケストラの最大特徴です。音楽は生活にうるおいを与えます。合奏の楽しさは、やったことのない人にはわかりません。現在部員募集中です。(入部希望者は大サービスします。)

もう一度言います。「しんこべいしょん」に是非どうぞ。

## TEA ROOM MUSIC INN

軽 音 楽 部

調布祭では、毎年評判になります。御機嫌なムードの喫茶店ミュージック・インを今年も開店いたします。

昼はコーヒと音楽を、夜はダンスを楽しんで下さい。どちらも生演奏でやります。毎年開くミュージック・インでも年により、クラブの雰囲気によりムードが違ってきます。今年のクラブ内の雰囲気は、昨年のサイケデリックを超えて、フラワーな、又、モダンジャズのもつ黒と赤のコントラストであるので、ミュージック・インも今年はラブ・インとなるでしょう。音楽の不変のテーマ「ラブ」を中心に素敵な雰囲気でお楽しみ下さい。

出演バンドは、ソウルフルなモダンジャズグループ、アバンギャルド、イージーリスニングジャズの、ブルーノーツ、今年又流行しそうなフォーク・ソング。そして夏らしくハワイアンを武蔵野女子大からの友情出演で、それぞれ演奏いたします。又、ピックアップグループによるロックも出演するかもしれません。

楽しさいっぱいの店ミュージック・インへぜひ御来店下さい。



ワッゲル食堂、本日開店ノ

山で食べる料理。我々の研究の  
成果を御試食下さい。

ワンダーフォーゲル部

焦げつくような夏の日射しの下、或いは情  
容赦の無い冷い雨に打たれての縦走路。肩に  
喰い込む、重い荷を背負って、何故自分はこ  
んな苦しい思いをしてまで山に登ろうとする  
のだろうか？ 此んな間に一日中煩悶しながら  
やっとたどりついたテント場。そんな時、  
今日一日の行程を思いながら取る夕食は、一  
日の疲れを癒やし、明日への活力をみなぎら  
せてくれる。テントの中にくつろいで、何も  
かも忘れ、ただ飯を喰う時、我々は今日一日  
の苦しみを忘れ、ただ山々の美しかった事だ  
けが頭に刻み込まれる。越えてきた一つ一つ  
の峰々の思い出と共に、各テント場で喰った  
飯の味も又、我々の忘れられぬ思い出となっ  
て残るのだ……………。

これ程山行に於て重要な役割をしめる食料  
の問題を研究し、以後の山行に役立てようと  
いうのが今回の我々のテーマです。山での料  
理は美味で栄養価が高い事が必要なのはいう  
までもありませんが、長い山行の上通風の悪  
い所に入れて持ち歩くので腐敗の心配も有り  
体力との兼ね合いで重量も軽くしなければな  
りません。その他、短時間で調理出来るとか  
腹もちの良い事も必要であり、又水の無い場  
合の事も考えたりと、冷蔵庫、水道、ガスと  
そろった台所での料理とはどうしても勝手が  
違って来ます。ともかくも、我々の研究の成  
果を料理にしてお待ちしております。あなた

もどうぞ御試食になって、山へ行った気分にな  
って下さい。

スナック“ボーゲン”

スキー愛好会

スキー人工何百万人などとテレビなどでい  
われている最近ですが、ほとんどの方が一度  
はゲレンデでスキーを楽しまれた事と思いま  
す。そこでまず行なうのがボーゲンですね！  
ほくらのスキー部も合宿の時は必ずボーゲン  
から始めます。特に去年など雪が少なくいつ  
もなら色とりどりのヤッケの人が滑っている  
所をエッチラ、オッチラと登り一年生のほく  
など雪なんかどこにあるんだろうかと、いい  
かげんいやになった時にやっと見えたゲレン  
デ、そこで滑ったのがボーゲンでした。そう  
したスキー最初の技術ボーゲンをスナックの  
名前にしてみました。ボーゲンはもう卒業し  
て今ではゲレンデでみんなの視線の中でウェ  
ーデルン・ゲレシュブとカッコ良く滑ってい  
る人にもボーゲンをマスターしようと頑張っ  
ていた時があったことでしょう。そのような  
時代の思い出にはいろいろと楽しいものがあ  
ることでしょう。“止まろうと思ってもスキ  
ーが自分の意志に反してどんどんスピードを  
上げていって、木にダキツイタ事、新雪に頭  
から突込み、足はスキーに固定され動かず、  
手はストックがじゃまでおまけに新雪では、  
のれんに腕押し、起き上がることは絶望的”  
どれもこれも楽しい思い出ですね。そのよう  
な思い出をスナック“ボーゲン”に来て話し  
合ってみませんか。ほくらの部員にも、おか



しな、トンマな失敗談の豊富な者が沢山います。クラブ員全員みなさまの楽しい話が聞けるものと楽しみにしています。ぜひスナック“ボーゲン”へ！来て下さいね。

## B A R コックピット

### ヨ ッ ト 部

コックピットとはヨットマンの憩いの場であり海におけるわが家である。

海を友とし、風を敵とし、ヨットを恋人とする我々の目的はただ一つ“レース”

ヨットについて知りたい者、なけなしの金でうまい酒を飲みたい者、潮風の匂いの好きな者、夏の浜辺が好きな女性、その他誰でも歓迎します。

当店には青海原に白いセールの花を咲かせるわが電通大のヨットマンがあらゆる飲み物を用意してお待ちしております。

なお、当店にて去年行なわれたヨットレースの8ミリを上映します。

## Rhythm & Tea Room

### 有 志

歌おう

さあ歌おう

とにかく歌おうヨ！

## — 人 間 復 帰 —

### ハ プ ニ ン グ ?

劇団：カルチュラタン

「今日、ママンが死んだ。もしかすると、昨日かも知れないが、私にはわからない。」

そこで僕は考えた、こう書き変えた。「1969年6月22日午後1～3時の間に彼は死んだ。それは絶対に彼だという事を、私は知っている。」これは、僕が、君が主人公である劇、そして現実である。そこには傍役がない。台本もない上に、誰が何をやるのかすらわかっていない。けれども、吾々は、彼が果して人間として生きているかどうかわからない現在の生よりも、はるかに人間として真実である死を、彼に擱まらせる事ができるのだ。僕等は、暗黙のうち知っているはずだ、彼が誰かを。この劇は、僕等に明るいイメージを与えはしても、けっして陰惨ではない、まさに彼は死ぬ事によって人間になるからである。彼は自然になることで、人間に復帰するからである。

あと書き（6月22日午後3時記す）

Q：御感想を。

A：大衆のエネルギーに圧倒されました。本当に、彼にとっては、死こそ生の誕生ではないですか、そう感じたね。

Q：単なるマスターベーションだと批難する人もいますか？

A：そうねえ。それは、この事を批判的に撰取して、今後の自分の行動にいかしうるかどうかにかかってくるんじゃないかな。確かに、自慰に終る可能性は多分にあるでし



よう。でも、どんな物だって受取人の感受性しだいですからねえ。ましてや、これには自分も参加したんだから、単に自慰行為としてしかうけとれなかった人は、よっぽどよく飼いなされた人ですね。

Q：ところで、あなたは主人公ですか？

A：これに参加した人は、やっぱり、みんな自分が主人公だと思うでしょう。

Q：では、これには傍役がないわけですね。最後に、この殺された彼は、一体誰だと思えますか？

A：前日のピラから判断して、ああ、あの人だと直感したね。でも、参加していくうちに、彼は、けっして、あの人だけではなく全国に存在するあの様な人の、そして、特に僕の大学で起った斗争の中で、その非人間性をあからさまに表わした人の、更には、もしかしたら僕自身の姿ではないかと思うようになった。そしたら、とても変な気分になっちゃった。明るい感じなんかうけなかったなあ。

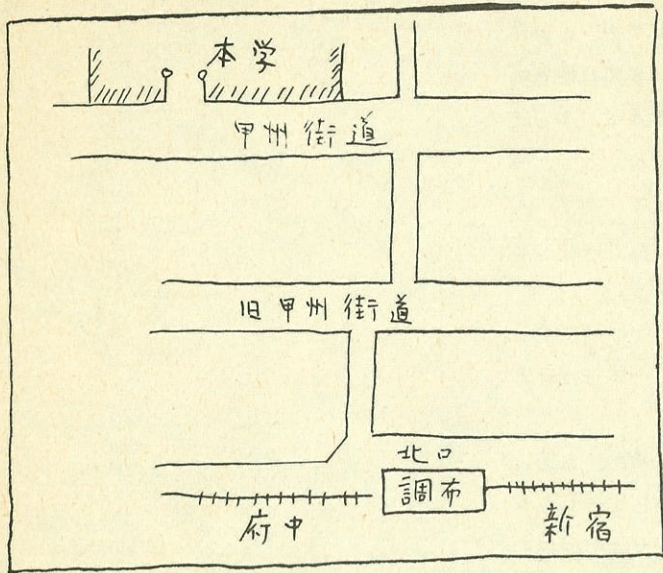
Q：そうですね。でも、あなたがそんな気分になったという事で、僕は、かえって、明るいイメージを持ちました。今日はどうも有難う御座居ました。

広告：求むノ テロリスト。

希望者は、文研部室へ、6月21日午後2時に来られたし。

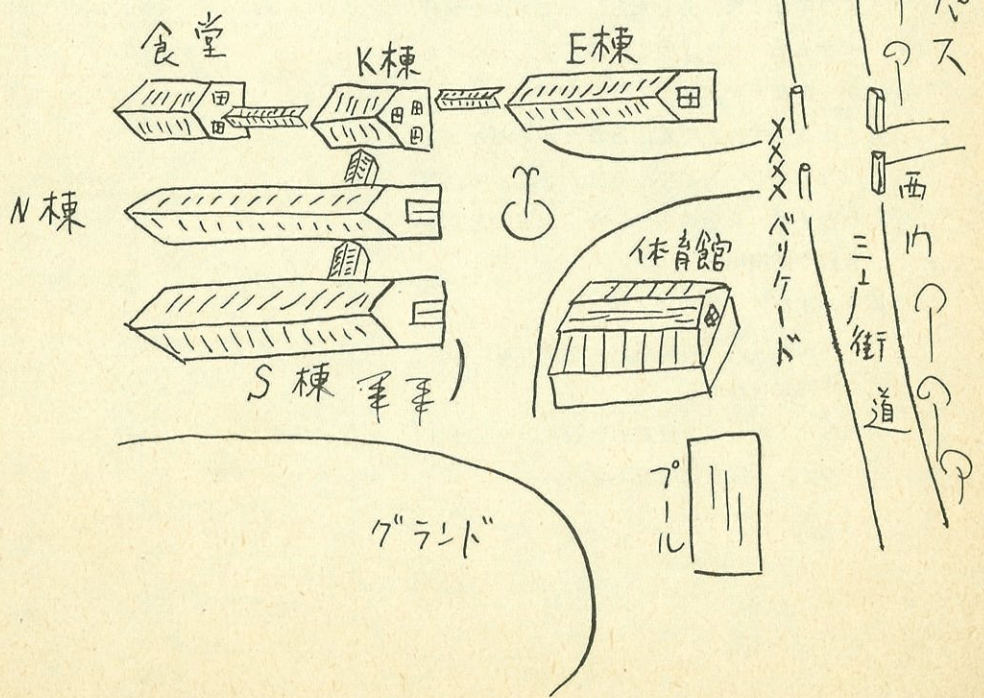
お知らせ：当日は、貴重品を販売いたしますので、小銭を御用意下さい。



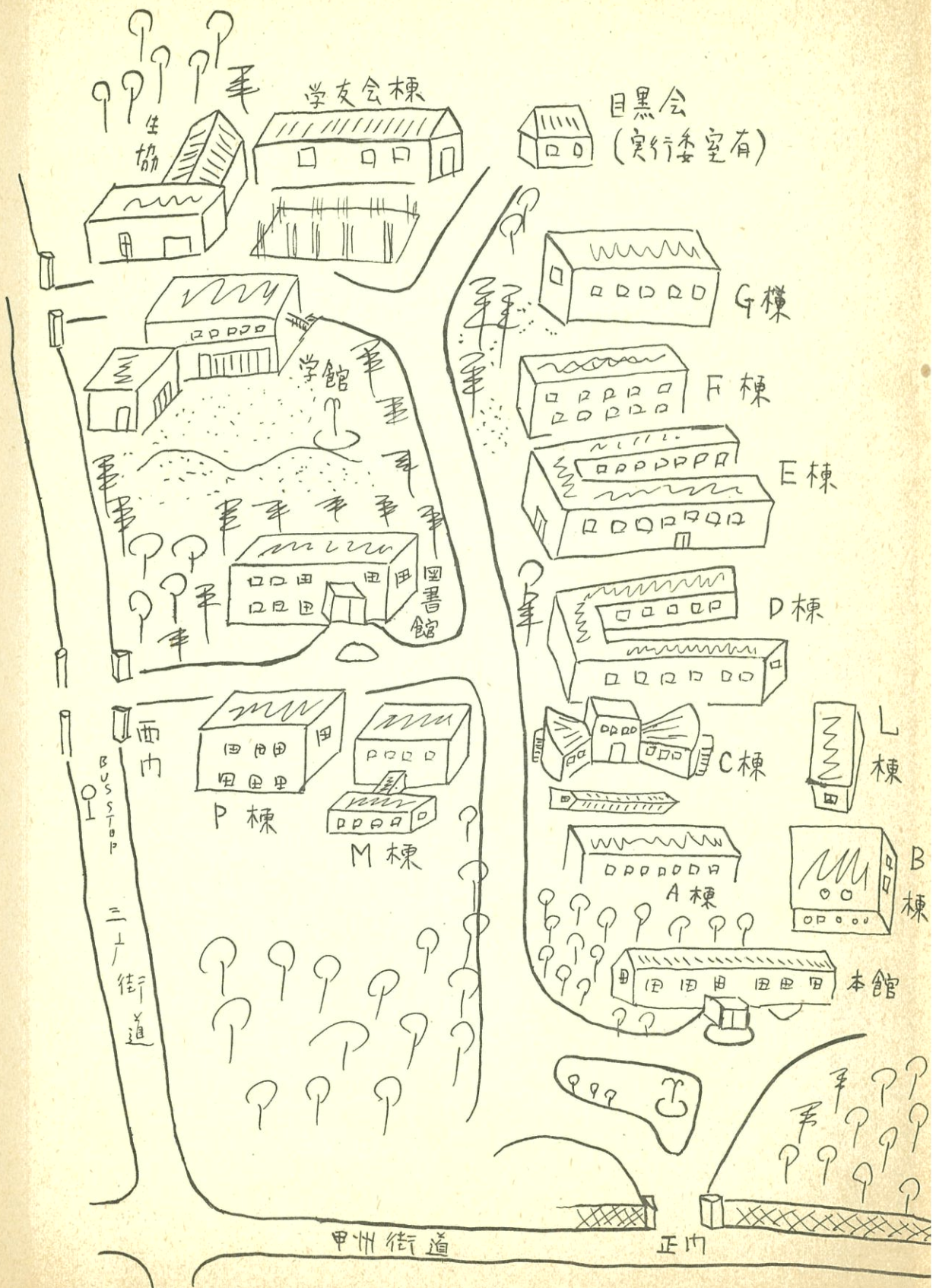


調布駅北口の徒歩1分  
バス(三丁↔調布)電通大前

### 調布寮









## 建物内展示・模擬店案内

- A 棟 101  
 102  
 201 安保問題—アスコット，韓国問題—韓国社会文化研究会  
 202  
 3 階  
 4 階
- B 棟 ロビー 写真展，サテライトスタジオ—放送研究会  
 101 放研  
 102 工学研究部 — 公開実験  
 201  
 202 講演会
- C 棟 ロビー 喫茶 — 軽音楽部  
 101 映画展示 — 東洋思想研究会  
 102  
 201  
 202  
 301  
 302  
 401  
 402
- D 棟  
 E 棟  
 図書館 美術展  
 学 館 小集会室 ESS 囲碁 } 催物日程参照  
 大集会室 グリー 舞研  
 音楽室 オーケストラ（喫茶，しんこぺいしょん）







調布祭実行委員会